

応仁の乱と精華町

1467（応仁元）年に始まった騒乱は、日本全国を舞台とした大紛争でした。戦闘が始まるとともに南山城の農村武士たちは、東西それぞれの陣営に動員されて京都にのぼったようです。3年後の1470（文明2）年からは、南山城地域自体が戦乱の舞台となり、地元の住民たちも紛争のルツボに投げ込まれていきました。

のちに応仁の乱とよばれるようになったこの騒乱は、室町幕府の権威の衰えや下剋上の風潮を背景として、上は將軍や守護大名の跡継ぎ争いから、下は各地の利害対立まで、いろいろな次元や、異なった要因の紛争が重なりあって生じたものです。將軍家では、足利義政が跡継ぎと決めた弟の義



東軍の大將 細川勝元像 龍安寺蔵

視と、義政の幼児義尚を立てようとする生母の日野富子とが争い、また有力大名の斯波氏や畠山氏でも跡継ぎをめぐる争いが生じていました。これらの紛争と、お互いに実力を競いあっていた細川勝元と山名宗全の対立とが結びついて、東軍・西軍の陣営が形成されました。相楽郡地方では、下狛の大北・大南・大西氏をはじめ、農村武士の多くが細川勝元がわ（東軍）の家来でしたが、なかには山田の中黒氏のように斯波義廉（西軍）の家来となったものもありました。また狛野荘（木津川市）の荘官である狛氏（東軍）としのぎを削っていた樺井氏は、畠山義就（西軍）の家来でした。



かみごりょうしゃ
上御霊社の合戦が大乱の始まりとなりました（京都市）

※荘官：荘園を管理する役人



応仁の乱で堂を焼失した泉橋寺地藏（木津川市）

1470（文明2）年に始まる南山城地域での戦乱は、前年に西軍に加わった大内政

弘の大軍がこの地域に攻め入ったことがきっかけでした。この攻撃によって、それまで東軍に属していた山城国十六人衆とよばれる農村武士のほとんどは降伏し、下狛の大北城が大内氏の本拠となりました。この後1477（文明9）年まで、大北城は西軍の南山城支配の拠点となり、東軍による攻撃の的になります。

下狛大北城付近での攻防は、大きなものだけでも2回ありました。1回目は1472（文明4）年、山城の土着住民の一揆鎮圧に攻め込んだ大和（奈良県）の筒井順永（東軍）が、いっきに大北城を攻撃し、城を焼き払った事件です。大内軍の大將は切腹しましたが、すぐに水主（城陽市）の大内



応仁の乱の合戦場面 「真如堂縁起」真正極楽寺蔵

軍が駆けつけたため、筒井軍は撤退して奈良に戻りました。

1475(文明7)年には、南山城と大和を舞台とする大きな合戦が起き、下粕地域も戦場となりました。この2回目の合戦は大内氏が相楽(木津川市)に新しい城を造り、これに対抗し

て東軍が木津郷西口に城を構えたことが、きっかけでした。下粕と木津天神川原の2カ所で大内軍と東軍の筒井・狭川・福住



下粕大北城跡推定地 手前田面が城があったと思われる場所

軍とが衝突し、多数の死傷者が出ています。

下粕に陣を張っていた大内軍が木津、奈良攻撃に向かうこともありました。1477

(文明9)年10月、よろい・かぶとに身を包んだ大内政弘の兵300と雑兵数千の大軍が、東軍の畠山政長に従っていた木津城の木津氏を攻め、般若寺(奈良市)まで進んだのです。奈良への攻撃は大和の武士古市氏の説得で中止されましたが、木津は丸焼けとなっています。

この翌月、大内政弘や畠山義統、土岐成頼といった西軍の主将がそれぞれの国に引き上げたため、応仁の乱は一応終結しました。しかし、この乱の結果、山城をはじめ多くの地が焼け野原になり、その荒廃は目をおおうばかりでした。

